

研究ノート

「北海道村落社会論」ノートより

黒崎 八洲次良

昭和四六年一〇月一三・一四両日の第十九回村研大会は、私にとって、まことに得がたい機会であった。途中、列車に事故があった予定よりも二時間余もおくれて京都に到達したことは損失であつたが、宿願であつた駿河岳・長浜を車窓より観望できたことをはじめとして、いくつかの忘れ得ないことを経験したのである。

私たちの宗旨は、いちおう、浄土宗であつたから、西山派の本山光明寺に参詣できたことも、よいことであった。なによりもありがたかったのは、この学会の共通課題での報告一とくに川本彰氏」とその討論を通して、私たちの北海道留寿都村の位置づけのための手がかりを与えたことである。いくつかの報告をまとめ、「留寿都村史」を公刊させていただったので、次は大家の経営のモノグラフをなんとかしなければと思っていたが、それには、これまでの作業と合せて、留寿都村の位置づけをしなければならない。明治、大正期の北海道農村における位置づけと、府県一いや、近代日本農村一般における北海道農村の位置づけ

との両方の作業をする必要があると考えていた私であった。そこへ、山形大学の大川氏が人口のあり方や動きに注目する必要を示唆してくれたことも、貴重なものであった。

翌朝一五日には、河村・柿崎両氏と大阪へ向った。河村氏は、少

少肥満ぎみの私に、「少しはムラを歩いた方がよいのではないか」と忠告してくれた。多分、私の健康のこと、留寿都村しか調査対象にしていないことからくる視野の狭いこと、勉強の量も質も不足していること、などについての忠告であろう。これもまたありがたいことである。なお、阪急の車中での河村氏の話も、今回の仕事には有益であった。

大阪では宿所が安原、吉沢両氏と同じであった、浴室へ行くと両氏がおられて、文字どおりハダカの交際をさせていただいた。そこで、吉沢氏から『調査研究叢書』へ応募したらと勇気づけられ、安原氏からも大いにすすめられた。部屋にもどってからいろいろと検討してみて、これは一つ応募してみようかといふ気持ちになつたのである。私にとって解決しなければならない作業の方針も、形をなしにあたし、これまでにその三分の一(?)は完了してしまった、などと考え、その夜はなかなか眠ることができなかつた。

北海道農村の位置づけの一部は「明治後期—大正期における北海道農業村落成立の前提についての若干の考察」に示した。それに、共通課題から教示されたものを展開する。それだけでは十分ではない。あれやこれやと考えているうちに、加田先生の『日本農業基礎統計』にもらっている府県資料、北海道庁統計書の耕地面積や農家戸数の累年の変化をみるといついたのである。もしかすると、

これを手がかりに、北海道農村一般の「成立—確立—成熟—ピーク」の画期をおさえることができるかもしない。まず、この作業にとりかかることにしよう。そう思ったのである。

## 二

私は、二人の人文地理学者によつて留寿都村を知つたのである。一人は渡辺操氏で、氏の業績によつて大西家を知る手がかりをえたのである。もう一人は有末武夫氏で、氏は青年時代(?)に羊蹄山麓の諸町村の耕地限界の変化を主題とするいくつかの報告をなされた。内田寛一先生は、私の留寿都村の報告のさいに、この両先駆の業績の興味深い内容を教示され、とくに、耕地面積を開発指標としてみてはどうか、その動きと生活行動パターンとくに農業技術体系とを関連させてみてはどうか、などと貴重なアイディアを示してくださいだったのである。内田先生は、また、「府県村落には歴史(伝統)」があるから、産業化の進行においても、その対応(富永氏の受動的適応)や適応においても、ナマの姿をとらえることはむずかしい。北海道においても、ナマの姿をとらえることが容易ではないと思うが、近代農業村落の成立と展開のモデルを用意することができるかもしれないよ。なにしろ、歴史形成の起点からみることができるかもしれないから。もつとも、移動がはげしく、資料もインフォーマントもとらえにくいかもしれないが。そこは、大もあるけば機にあたる。大いにがんばれ!」と勇気づけてくれた。それから、サービス機関—鈴木栄太郎氏の社会的交流の結節機関の設置や機能、サービス圈に注目するように教示していただいた。とくに、墓地や公立学校、神社や寺院の設置や統廃合と耕地面積および人口・戸数の変化との関連

をよくみるようになつた。しかし、それらの御教示を手がかりにして調査を進行せらるようになつた時には、内田先生は故人になられて数年を経ていた。

内田先生とともに、この面で私を導いてくれたのは、現地の酪農家の齊藤恭三氏と役場助役西岡音吉氏であった。齊藤氏は土地台帳をよくみると、その時に所有権者の変化だけでなく、地目・地種の変化に注目するように教えてくれた（『書齋の窓一五〇号』）。西岡氏は大正初期からの長い吏員経歴とすぐれた記憶力の持主であつたが、御自分の知らないことを隠す人物ではなかつた。そこで、私は資料を整備して疑問点が出てくると西岡氏に質問したのである。彼の説明はきわめて具体的であった。各種の資料から宅地・山林・原野・畑の年次別変化をみて、いくつかの質問をする。彼はそれに答えてくれたが、翌朝、彼と役場への路上で会うと、私に四国の山岳とその斜面を指さして、そのことを具体的に説明してくれたのである。

四国の斜面は低地から高地にむけて畑・牧草地・人工林・天然林・山頂に、くつきりと区分されている。貫別岳・尻別岳（前方羊蹄）・羊蹄山（後方羊蹄）のどの斜面をみても、同様なのである。氏によると、人工林の大部分が大正初期は畑地であったが、第一次大戦後、どんどん、不作付化・耕作放棄され、昭和戦前期の合理化の過程で植林されたのである、といふ。この頃には、屋敷地の周辺でも、傾斜地や沢は植林するか、牧草地に切り換られたのであつた。なお、村税の滞納や徵税不能、戸数の激減・とくに小作農家の夜逃げから經濟更生運動の事情について、政策実施者として、彼は詳細に説明してくれたのである。これは大いに有益である。

あつた。

### 三

そうこうしているうちに、北海道社会学会より第二〇回年次大会に報告するよう依頼があった。「北海道の村落研究」という主題であったが、内容は報告者に一任（？）という寛大なものであつた。そこで、「明治・大正期の北海道農業村落の成立と展開」という主題で報告することにした。まず、『日本農業基礎統計』によつて農家数と耕地面積の年次変化をあとづけてみる。農家数については、明治二一年から明治三一年までのほとんどが不明であるが、耕地面積については明治一四年から昭和一五年までの各年次を把握することができる。耕地面積と農家数の両方とも、二つのピーカーがある。耕地面積は大正一〇年と昭和一二年、農家数は大正八年と昭和一一年である。大正期のピーカーをそれぞれ一〇〇としてグラフを作つてみる。耕地面積がピーカーの五〇%に達したのは明治四年であったが、農家数がピーカーの五〇%に達したのは明治三年である。農家数の推移が耕地面積のそれに先行することは、指数五〇の点においては九九年である。しかし、指数八〇に達したのは、農家数において明治四二年、耕地面積において大正四年、その時間差は六九年。ピーカーの時点においてはその時間差は二カ年に縮小してしまうのである。それ以後の推移にみると時間差は段どんと一・二年以上に開くことはない。これは面白いと、私はひとり悦に入つてゐる。

そこへ、同僚の荒木氏が入つてくる。事務連絡をすませてから、出来上ったグラフをみていたくと、彼は、この曲線がシームベーターの技術革新が景気・経済活動に与える影響を示すモデル

によく似ている、とう。さらに、それはロジスティック曲線とみてよい、とう。かりに明治一年の開拓使設置を北海道の農業の組織的開発の起点とし、耕地面積を開拓指標としてみよう。前述のように、大正一〇年の耕地面積を一〇〇としておく。そうすれば、明治二七年に一〇、明治四一年に五〇、大正四年に八〇となる。大正四年の八〇をとりあげたのは、大正二年の大冷害を契機として「旧開拓地帯」を中心として「外延的展開」から「内包的充実」への転換の動きがあったという事実による。もつとも、これが本格化するのは世界第一次大戦のことである。さて、このようにみると、開発の速度が一様でないことがわかる。開拓の起点から開拓指数五〇までに四〇カ年を要したのに對して、五〇一一〇〇までに一三カ年を要しており、前半期に対し後半期のそれは三分の一の短期間でしかない。さらに、曲線上の変曲点をとらえて、他の資料と合せて検討してみると、「成立→確立→成熟→ピーク→停滞→再編成」とモデル化できるのであつた。

これはいけると思ったが、北海道の傾向と虻田郡真狩村（留寿都村）の傾向を、どのように比較することができるかが次の困難となる。真狩村の耕地面積についての資料が十分でないことを、すでに承知していた私は、これを現住人口で代替できるのではないかと考えてみた。北海道大学の御好意で『北海道戸口表』（明治二五一年）の大正七年のマイクロ・フィルムを入手していたので、これに村史編集のさいの資料を併用すると、まことによい曲線をえがくことができる。真狩村の有業人口の七割以上が農業就業者に占められていた（大正九年）ので、これを北海道の開拓指標として採用した耕地面積に代替できるとすれば、この曲線の形やピークの時期は北海道

のそれらと酷似するものである。そして、胆振国や後志支庁の耕地面積が示す曲線や虻田郡の現住人口が示す曲線とも、それは酷似するのである。北海道社会学会の年次大会のさいには、留寿都村の北海道農村としてのサンプル代表性についての確信はなかつたが、それは明治一一大正期の北海道農村として特殊・具体的な存在ではあるが、決して特異な、例外的な存在ではない。その意味で十分にサンプル代表性をもつものであると、主張したい。もつとも、明治一一大正期を超える時期についてのそれをどうに確めるかは、私にのこされた課題である。

#### 四

留寿都村が明治・大正期の北海道農村としての代表性をもつとすれば、次に、北海道農村の多く一明治後期から大正期に成立し展開している一が、日本近代農村のなかにどのよう位置をもつかを確かめなければならまい。そこで、柿崎氏の「行政区」としての部落と「部落有財産区」としての部落のカテゴリを借用して、三つの類型を設けてみた。部落の全構成員が行政区と財産区の両方に参加しているもの。部落の構成員の一部が財産区から排除されているもの。財産区をもたないか、もつてもほとんど部落生活にかかわりをもたないとみなしてよいもの、の以上である。明治前期までに成立した少數の北海道農村のぞくと、北海道の農村はほとんど第三の類型に属する。府県農村にはたして第三の類型に属するものがあるか、どうか。

福島、川島兩先生のグループの入会地についての御研究をみると、明治後期には入会地のもつ意義が極度に縮小しているか、それとも、観念的、イデオロギー的、私の用語では「歴史」的な

ものになつてゐることは、明白である。このことは、中村吉治先生のグループの『村落構造の史的分析』にも、明らかである。しかし、まったく部落有財産区をもたない部落があるか、部落機構を「土地所有」の論理だけで動かしてゐる事例があるかどうか。この角度からみて行くと、須永重光先生を中心とする東北大學農学研究所グループの『近代日本の地主と農民』を参照せざるをえなくなつた。これは宮城県南郷町の研究であるが、この書物が上梓される以前からのこのグループの御研究——とくに、安孫子麟氏の御業績に私の仕事はきわめて多くを負つてゐる。大地主の成長過程と部落有財産の統一——水田単作地帯における部落の確立——についての詳細な記述が、古島・守田の両先生の新潟県水田単作地帯の御研究とともに、私に第三の類型の部落の存在を想定させたのである。

しかし、私は観念的・イデオロギー的なものを軽視しようと思つていいし、いわんや、無視することなどは到底できるとではない。「歴史」のあさく、ふかいが、ときには、部落や農民の活動を大きく規定すると考えるからである。そして、そこに、府県農村と北海道農村の大きな差異があるのでないかと考えるのである。さて、部落の構造が前述のようであり、地主・小作関係がきわめて流動的である——そうでなければ、大量の移住戸の流入、換言すれば、府県からの拠家離村が生じない——とすれば、部落での農家の生活の中核農家の必要性がとくに重要となる。中核農家というアイディアは、川本氏の島根県匹見町の調査報告に負つている。これは地主エージェント説にちかいものに見えるかも知れない。しかし、私は、部落へのはげしい出入りのつづくなかで、仮に、二、三年という短い期間であれ、そこに定住するためには、新来住者に

とつてなんらかの手がかりが必要であろう、と考えている。その手がかりの一つが、中核農家である。これが、部落の内部と外部とをつなぐ「エージェント」の役割をはたすことは当然であろう。しかし、その役割が契約的・限定的なものへと縮小し、それが機関と組織の手に移行するにいたるまで、つまり、本家・末家体制から町村（産組）——部落（実行組合）体制へ移行するまでの、いわば、過渡期——私にとって、現代に対する近代——において、中核農家は流入する周辺農家にとって近隣組織のまさに中核であり、これなしには、農家生活が成り立ちえなかつたのではないが、と考えてゐる。そして、この意味で、それは社会的交流の結節機関——一種の情報センターと考えてゐる。

七月になつて、私の手もとに『近代農業村落の成立と展開』が送られてきた。これも、みな、福武先生をはじめとする会員の皆様方のおかげと思い、ふかく感謝している。本年は北海道でも猛暑（？）といつてよい夏である。八月八日に北四線の大西家を訪問した折に、昭和二五年から四五年までの経営の記録のことを話していただき、これでまた、なかなか、留寿都村から離れることができない、と思った。ありがたいことである。